めくらぶどうと虹（にじ）

宮沢賢治

城あとのおおばこの実は結び、赤つめ草の花は枯れて焦茶色になり、畑の粟は刈られました。

「刈られたぞ」と言いながら一ぺんちょっと顔を出した野鼠がまた急いで穴へひっこみました。崖やほりには、まばゆい銀のすすきの穂が、いちめん風に波立っています。

その城あとのまん中に、小さな四つ角山があって、上のやぶには、めくらぶどうの実が虹のように熟れていました。

さて、かすかなかすかな日照り雨が降りましたので、草はきらきら光り、向こうの山は暗くなりました。

そのかすかなかすかな日照り雨が霽れましたので、草はきらきら光り、向こうの山は明るくなって、たいへんまぶしそうに笑っています。

そっちの方から、もずが、まるで音譜をばらばらにしてふりまいたように飛んで来て、みんな一度に、銀のすすきの穂にとまりました。

めくらぶどうは感激して、すきとおった深い息をつき、葉から雫をぽたぽたこぼしました。

東の灰色の山脈の上を、つめたい風がふっと通って、大きな虹が、明るい夢の橋のようにやさしく空にあらわれました。

そこでめくらぶどうの青じろい樹液は、はげしくはげしく波うちました。

そうです。今日こそただの一言でも、虹とことばをかわしたい、丘の上の小さなめくらぶどうの木が、よるのそらに燃える青いほのおよりも、もっと強い、もっとかなしいおもいを、はるかの美しい虹にささげると、ただこれだけを伝えたい、ああ、それからならば、それからならば、実や葉が風にちぎられて、あの明るいつめたいまっ白の冬の眠りにはいっても、あるいはそのまま枯れてしまってもいいのでした。

「虹さん。どうか、ちょっとこっちを見てください」

めくらぶどうは、ふだんの透きとおる声もどこかへ行って、しわがれた声を風に半分とられながら叫びました。

やさしい虹は、うっとり西の碧いそらをながめていた大きな碧い瞳を、めくらぶどうに向けました。

「何かご用でいらっしゃいますか。あなたはめくらぶどうさんでしょう」

めくらぶどうは、まるでぶなの木の葉のようにプリプリふるえて輝いて、いきがせわしくて思うように物が言えませんでした。

「どうか私のうやまいを受けとってください」

虹は大きくといきをつきましたので、黄や菫は一つずつ声をあげるように輝きました。そして言いました。

「うやまいを受けることは、あなたもおなじです。なぜそんなに陰気な顔をなさるのですか」

「私はもう死んでもいいのです」

「どうしてそんなことを、おっしゃるのです。あなたはまだお若いではありませんか。それに雪が降るまでには、まだ二か月あるではありませんか」

「いいえ。私の命なんか、なんでもないんです。あなたが、もし、もっと立派におなりになるためなら、

私なんか、百ぺんでも死にます」

「あら、あなたこそそんなにお立派ではありませんか。あなたは、たとえば、消えることのない虹です。変わらない私です。私などはそれはまことにたよりないのです。ほんの十分か十五分のいのちです。ただ三秒のときさえあります。ところがあなたにかがやく七色はいつまでも変わりません」

「いいえ、変わります。変わります。私の実の光なんか、もうすぐ風に持って行かれます。雪にうずまって白くなってしまいます。枯れ草の中で腐ってしまいます」

虹(にじ)は思わず微笑(わら)いました。

「ええ、そうです。本とうはどんなものでも変(か)わらないものはないのです。ごらんなさい。向(む)こうのそらはまっさおでしょう。まるでいい孔雀石(くじゃくせき)のようです。けれどもまもなくお日さまがあすこをお通りになって、山へおはいりになりますと、あすこは月見草(つきみそう)の花びらのようになります。それもまもなくしぼんで、やがてたそがれ前の銀色(ぎんいろ)と、それから星をちりばめた夜とが来ます。

そのころ、私は、どこへ行き、どこに生まれているでしょう。また、この眼(め)の前の、美(うつく)しい丘(おか)や野原(のはら)も、

みな一秒ずつけずられたりくずれたりしています。けれども、もしも、まことのちからが、これらの中にあらわれるときは、すべてのおとろえるもの、しわむもの、さだめないもの、はかないもの、みなかぎりないいのちです。わたくしでさえ、ただ三秒ひらめくときも、半時空にかかるときもいつもおんなじよろこびです」

「けれども、あなたは、高く光のそらにかかります。すべて草や花や鳥は、みなあなたをほめて歌います」

「それはあなたも同じです。すべて私に来て、私をかがやかすものは、あなたをもきらめかします。私に

与えられたすべてのほめことばは、そのままあなたに贈られます。ごらんなさい。まことの瞳でものを見る人は、人の王のさかえの極みをも、野の百合の一つにくらべようとはしませんでした。それは、人のさかえをば、人のたくらむように、しばらくまことのちから、かぎりないいのちからはなしてみたのです。もしそのひかりの中でならば、人のおごりからあやしい雲と湧きのぼる、塵の中のただ一抹も、神の子のほめたもうた、聖なる百合に劣るものではありません」

「私を教えてください。私を連れて行ってください。私はどんなことでもいたします」

「いいえ私はどこへも行きません。いつでもあなたのことを考えています。すべてまことのひかりのなかに、いっしょにすむ人は、いつでもいっしょに行くのです。いつまでもほろびるということはありません。けれども、あなたは、もう私を見ないでしょう。お日様（ひさま）があまり遠くなりました。もずが飛（と）び立ちます。私はあなたにお別（わか）れしなければなりません」

　停車場（ていしゃじょう）の方で、鋭（するど）い笛（ふえ）がピーと鳴りました。

もずはみな、一ぺんに飛（と）び立って、気違（きちが）いになったばらばらの楽譜（がくふ）のように、やかましく鳴きながら、東の方へ飛（と）んで行きました。

めくらぶどうは高く叫(さけ)びました。

「虹(にじ)さん。私をつれて行ってください。どこへも行かないでください」

虹(にじ)はかすかにわらったようでしたが、もうよほどうすくなって、はっきりわかりませんでした。

そして、今はもう、すっかり消(き)えました。

空は銀色(ぎんいろ)の光を増(ま)し、あまり、もずがやかましいので、ひばりもしかたなく、その空へのぼって、少しばかり調子(ちょうし)はずれの歌をうたいました。

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店
　　　１９６９（昭和44）年７月20日改版初版発行
　　　１９９３（平成５）年６月20日改版71版発行
※本作品中には、身体的・精神的資質、職業、地域、階層、民族などに関する不適切な表現が見られます。しかし、作品の時代背景と価値、加えて、作者の抱えた限界を読者自身が認識することの意義を考慮し、底本のままとしました。（青空文庫）
入力：蔦田佳子
校正：平野彩子
ファイル作成：野口英司

２０００年8月25日公開
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。